

『ライ麦畑でつかまえて』の英語
その五 直喩的表現——'like hell' その他

杉 浦 銀 策

『ライ麦畑でつかまえて』の第三章に次のような文章が出てくる。

"Up home we wear a hat like that to shoot *deer* in, for Chrissake," he said.

"That's a deer shooting hat."

"Like hell it is." I took it off and looked at it. (30; 22)

「ぼくの田舎のほうでは、そんな帽子は鹿撃ちのときかぶるんだぜ。ほんとだとも」と彼は言った。「鹿撃ちの用の帽子だよ」

「そんなことあるもんか」ぼくは帽子を脱いで眺めてみた。

また第十七章では次のような文章が出てくる。

They (=old Salley's ankles) not only looked stupid as hell, but probably hurt like hell, too. (167-8; 129)

サリーの足首の恰好悪さったらなかったが、その上いかにも痛そうだった。

前者の引用に見られる'like hell'は文頭にきて強い不信や軽蔑、否定を表す働きをしている。一方、後者の'like hell'は動詞の直後にきて、その動詞の意味を強める機能を果たしている(形容詞の意味を強める'as hell'については次回にまわす)。いずれも「地獄のように」という直喩(simile)的言い回しであるが、直喩には記述的直喩(descriptive simile)と強意的直喩(intensifying simile)の二種類があり、上の引用に見られる'like hell'はいずれも強意的直喩であることはいうまでもない。

まず文頭にくる 'like hell' から始めることにしよう。

H. L. メンケンは、"he ran like hell." (彼は死に物狂いで走った)のように動詞の直後にくる 'like hell' はどうやらイギリスに起源をもつものらしい (apparently an English invention) が、文頭にくる "Like hell you will." (とんでもない) における 'like hell' はアメリカ的な形 (form) だと言う。¹しかし文頭にくる 'like hell' がアメリカ起源であるとは必ずしも言いきれないところもあり、*OEDS*では次のような用例が引かれている。

1892 Kipling *Lett. of Travel* (1920) 66 'Hit, old man?' 'Like hell,' he said.

この引用は大変貴重なものらしく、*HDAS*ではこれをもっと正確なカタチで引用している。

like hell

2. (used sarcastically or ironically to express strong negation or incredulity)

*1892 in Kipling *Works* XIX 66: "Hit, old man?" "Like hell," he said, and went on biting his unlit cigar.

「おい、撃たれたのかい？」 「なんの、なんの」と彼は言って、火のついていない葉巻を噛みつぶした。

*HDAS*がこの引用に星印を付したということは、これ以前にも古い用例があることの可能性を示したものである。それにもかかわらず *HDAS* がこの 'like hell' の項目を載せたということ自体、これがどちらかというどアメリカ語的俗語、少なくともアメリカで圧倒的に使用される俗語であるという認識を示したものにほかならない。(因みに *DAS* も同じ立場を取っている)そしてこのすぐ後に *Dos Passos* からの用例を引いている。

1921 *Dos Passos* 3 *Soldiers* 16: Like hell he did.

あいつがやったなんて、とんでもない。

『三人の兵士』では同じ使い方の 'like hell' が第六部にもう一度だけ出てくるが、一九二〇年代にさかんに使われたらしく、フィッツジェラルドの『偉大なギャツビー』(1925) やフォークナーの『兵士の給与』(1926) に

も見られる。まず『偉大なギャツビー』からの引用。

"An Oxford man!" He was incredulous. "Like hell he is! He wears a pink suit."²

「オックスフォード出の男だなんて！」彼は全然信じていなかった。
「開いた口がふさがらないね！ ピンクの服を着ているあの男が」

これは大金持ちのトム・ブキャナンがギャツビーを評して言う言葉である。次に『兵士の給与』から。

"... Listen, I had a swell jane and she said, 'for Christ's sake, you can't dance.' And I said, 'like hell I can't.'"³

「...おい聞けよ。おれには可愛い娘っ子がいたんだが、こいつが言うんだ。『あらまあ、あんたダンスができないのね』ってさ。そこでおれは『ちゃんとできるさ』って言ってやったんだ」

総じてアメリカ深南部を舞台とするフォークナーの小説群は、『ライ麦畑でつかまえて』との言語的連続性が非常に希薄であるような印象を少なくとも私は受けるのだが、『兵士の給与』は第一次世界大戦の帰還兵士を扱っているだけに、ドス・パソスやヘミングウェイとの共通性があり、それだけ『ライ麦畑でつかまえて』の英語にほんの少しは接近しているのかな、などという空想を私は抱く。このように文章の冒頭にくる 'like hell' はアメリカではさかんに使われるのだが、この問題がイギリスの現代小説ではどうなっているのか、私には分からない。

じつはこの種の 'like hell' に先んじて、これと同じ意味を表すのに 'the hell' がアメリカでは早くから使用されてきたが、この方がより強い言い方のような気がする。つまり逆に言えば、'like hell' は 'the hell' よりもなにほどこかの婉曲性を帯びているような気がするのだが、どうだろうか。とにかく注目すべきは、『ライ麦畑でつかまえて』ではこの種の文頭にくる 'the hell' が一度も登場しないということだ。ということは同時にホールデンの使うスラングが卑俗さの点でそんなに度を過ぎるものではないということの証拠になる、というのが私の見方である。

またすでに本稿の〈その三 'crap' の素性と用法〉で述べておいたよう

に、ホールデン好みの 'like fun' は 'like hell' のさらなる婉曲語法である。

ことのついでにここで文頭にくる 'the hell' について若干考察してみると、早い話が、『ランダムハウス英和大辞典』第二版では次のような要を得た解説がなされている。

(2) (文頭で) (皮肉やあざけりを込めて、言葉と反対の気持ちを表して) 絶対...ない、なんてとんでもない: Are you listening to me? The ~ you are! 聞いているのか。聞いていないな。

このような文頭にくる 'the hell' は極めてアメリカ的な用法で、*HDAS* は十九世紀の前半からの例を引いている。

1843 [W. T. Thompson] *Scenes in Ga.* 32: The h—ll you is!

まさかお前が。

1844 *Spirit of Times* (Mar. 16) 27: "Mr. President, the Capitol is on fire," said a Senator. "The hell it is!" said the President.

「大統領閣下、議事堂が燃えています」とある上院議員が言った。「なにをバカな！」と大統領。

これが今日までつづいているわけで、ドス・パソスの『三人の兵士』(1921) などでも次のように使われている。

"Their trains run faster than ours," said Eisenstein.

"The hell they do..."⁴

「やつらの汽車はおれたちのよりはやく走るんだよ」とアイゼンシュタインが言った。

「まさか...」

というわけで文頭にくる 'the hell' はどうやらアメリカ生まれのものらしい。上に挙げた三つの用例のうちの最初のもは、ウィリアム・タッパー・トムソン (1812-82) というオハイオ州生まれのユーモア作家の作品に出てくることになっている。彼は長らくジョージア州に住み、その貧乏白人

を好んで描いた。用例はそうした田舎人の言い方を取り上げたものであろう。ただもう少し古い用例が見つからないものか、というのが目下の私の心境である。

他方、英国では古くから'the hell'ではなく、'the devil'が使用されていた。たとえばOEDは'the devil'の項でこの種の用例の引用を十六世紀から始め、かつ次のような興味深い解説的文章を載せている。

a 1661 Fuller *Worthies* (1811) I. 386 We have an English expression, 'The Devil he doth it, the Devil he hath it' ; where the addition of devil amounteth only to a strong denial, equivalent to, 'he doth it not, he hath it not.'

つまり文頭に'the devil'をもってくると、強い否定の意味を表す言い方になる、と述べているわけで、このことは逆に英国では十九世紀はじめにはまだ'the hell'を代用する習わしが存在しなかったということを示すものであろう。

ところで、今から七十年近くも前の一九三一年に、L. M. Merryweatherという人が"*Hell in American Speech*"という論文を発表したことがあった。その中で彼は、かつて人々は地獄のことを'the other place'と呼んだり、マーク・トウェーンなどは'hot as the hereafter'などという滑稽な婉曲語法を発明したりした時代もあったが、今ではだれもかれも'hell'を見境なく使って、本来の名詞的用法から動詞的、形容詞的、間投詞的、いや副詞的な用法にいたるまでいたるところで幅を利かせている、といった意味のことを述べている。⁵

これを読みながら、われわれは、そういえばトウェーンにあっては'hell'を含むいい方がまことに寥々たるものがあったな、などと改めて思い返してみる。たとえば『ハックルベリー・フィンの冒険』(1884;1885)の場合などは、次の例に見られるような「地獄に墜ちる」('go to hell')という文字通りの表現以外は'hell'という言葉は登場しない。

...and how near I come to being lost and going to hell. (XXXI, 271)

もう少しのところで過ちをおかして地獄に墜ちるところだった。

"All right, then, I'll go to hell" — and tore it up.(XXXI, 272)

「よーし、それじゃ、地獄へ行ってやろう」－そう言って紙を引き裂いた。

『ハック・フィン』の物語が舞台となっている十九世紀前半におけるミズーリ州からアーカンソー州にかけての南西部の田舎では'like hell'や'as hell'、あるいは'the hell'のような俗語的語法があまり使われていなかったのだろうか。そうではあるまい。先に挙げたジョージア州の話し言葉'the hell'や、あるいはのちほど登場するスティーヴン・クレインの『赤い武勲章』(1895)における田舎育ちの兵士の'like hell' (ただしこれは動詞の直後にくる例) に見られるように、よく使われていたのに違いないのだ。おそらくマーク・トウェーンは読者の顰蹙をかうことを恐れてそうした表現を慎重に避けたものと思われる。トウェーンもなにほどかの<お上品な伝統>の流れの中にあっただのだ。

ウェザー氏はさらにこう書きつづける。

For instance, it is used, in phrases, as the equivalent of negative adverbs, and as intensifier of negative adverbs.

The hell you say! (= *You don't say!*)

Like hell I will! (or) *I will like hell!* (= *I will not!*)⁶

この例に見られるように、否定を意味する'like hell'は必ずしも文頭にくるとは限らないらしいのだが、小説作品の中ではあまり見かけない。それよりも問題は、メリウェザー氏のいう、こうした言い回しが文学史に残る小説作品の中でいつごろから登場し始めたのだろうか、ということである。残念ながら浅学非才の私のこと、これに答える用意がまだできていない。

つぎに動詞の直後にくる'like hell'について。

『ライ麦畑でつかまえて』では、'like hell'によって修飾される動詞は、'hurt,' 'shake,' 'hate,' 'rain,' 'shiver,' 'chatter,' 'run,' 'run,' 'yell'などで、その中でも'hurt'がいちばん多い。安藤貞雄氏も、このことについて次のように述べている。

Like hell は、特に、*hurt* と共起することが多い。⁷

これが'hurt'とともに多く使われるということは、必ずしも偶然ではないのかもしれない。たとえばウィリヤム・ギヤスの長篇『トンネル』(1995)に次のような用例があるからだ。

My mother drank to fill her life with the warmth which had long ago leaked out of it; and my father hurt like hell because his mother had, because he had inherited the wrong proclivities, his arthritis an arch between two sagging generations.⁸

おふくろはとつくの昔に^か涸れてしまった^{ぬく}温もりで自らの人生を満ちそうと^{やげざけ}自棄酒を^{あお}煽った。一方親父は、彼自身の母が原因となってひどい肉体的苦痛に悩まされていた。遺伝的病質を受け継いでいたからである。彼の関節炎は二つの沈みゆく世代をつなぐアーチともいうべきものであった。

作者のギヤスが六百ページを超える大作の中で'like hell'をまったくといってよいほど使っていないのに、敢えてここで'hurt like hell'と言ったのは、頭韻の効果を出そうとしたために違いない。ただホールデンも頭韻の効果^をを念頭に入れていたとは考えにくいのだが。

この種の'like hell'は、要するに'like the (or a) devil'と同じ意味に使われる俗語的成句である。*HDAS* は十八世紀初頭のアメリカの用例を挙げている。

1813-18 Weems *Drunkard's Looking Glass* 61: He continues to bawl out that you are a "d-d clever fellow," and swears by his Maker, that "he loves you like h-l."

お前は「とてつもなく利口な奴だ」と彼はわめきつづけ、そして「そのお前が好き好きでたまらないんだ」と天地神明に誓って言う。

これに対して*OED* はサッカーからの例を引いている。

1855 Thackeray *Newcomes* I, xxix, I tried every place...and played like hell.

私はいたるところを試してみて、...思いっきり遊んだ。

これら二つの用例を眺めながら、私は、動詞の後にくる 'like hell' はイギリス人の「発明」(invention)らしいというメンケンの推測にもかかわらず、イギリスとアメリカのどちらが早いのだろうと考え込んでしまう。しかしどちらが早いかはともかく、その後英米双方ともこれをよく使い、*OEDS* は D.H. ロレンスからの例文を引いている。

1922 D. H. Lawrence *England, My England* 231 'And I shall miss thee, Jack.'... 'Miss you like hell.'

「ジャックさん、あんたがいなくなれば淋しくなるなあ」...「こちらも淋しくてやりきれなくなる」

他方、次のスタインベックの書簡に見られるように、むろんアメリカでも 'miss... like the devil' が使われる。一九五七年九月に東京から妻 Elaine 宛てに書いた手紙である。

I can't sleep and I miss you. Miss you like the devil.⁹

眠れなくてお前が恋しい。お前がいなくて本当に淋しい。

ここでアメリカ小説に出てくる 'like hell' の例を二、三挙げておこう。1) はステイーヴン・クレーンの『赤い武勲章』から。2) はドス・パソスの『三人の兵士』から。3) はサリンジャー自身の『ハプワース・16・一九二四年』(1965)からのもの。この最後の例は、'like' と 'hell' の間に 'sheer' を挿入して大袈裟に強調してみせるあたりが珍しい用例だといえるだろう。天才少年シーモア・グラスが家族宛てに書いた手紙の中の言葉である。

1) "...an' that boy, he ses, 'Your fellers'll all run like hell when they onct hearn a gun,' he ses."¹⁰

「...あの小僧っこが言うんだ、『おめえとこの仲間は銃声を聞いたとたん、一斉に逃げ出すにきまってらあな』ってな」

2) "He must have lied like hell to get in this Goddam army," boomed the

deep voice of the truck driver,...(362)

「あいつはこの糞いまましい軍隊に入るのにとんでもない嘘をついたに違いない...」というトラックの運転手のだみ声が響きわたった。

3) As you must know in your hearts and bowels, we miss you all like sheer hell. ¹¹

きっとそちらも十分気付いておられることとは思いますが、ぼくたちは家族の皆様が恋しくて恋しくてたまらない気持ちです。

なおヘミングウェイの書簡では'like the deuce'もさかんに使われ、ときには"Thanks like hell for the letter that came today."(1927)という言い方もする。しかし『ライ麦畑でつかまえて』のホールデンは'like the devil'とか、'like the deuce'などという言い方は一度もしない。ひたすら'like hell'をさまざまな動詞とともに繰り返し繰り返し使う。また"Thanks like hell"ではなく、"Thanks a lot."(251; 173)という穏健な言い方をする。

では、'like hell'以外の'like'を伴った直喩は『ライ麦畑でつかまえて』でどうなっているだろうか。これについて結論的なことを先に述べておけば、ホールデンの直喩表現はほとんどすべて言い古された、紋切り型的なものばかりである。一見新奇なもののように見えて、独創性を感じられない場合が多い。しかしそうかといってまったくホールデンらしさが感じられないというわけでもない。その辺のことに留意しながら、以下に具体的な例を列挙し、かつ簡単なコメントを付すことにする。

1) He (=old Spencer) started chuckling like a madman. (11; 18)

スペンサー先生はさかんに独り笑いをはじめた。

2) I hate the movies like poison,... (38; 29)

ぼくは映画が大嫌いなんだ。

3) I landed on him like a goddam panther. (39; 30)

ぼくは豹のように彼にとびかかった。

- 4) They laughed like hyenas at stuff that wasn't even funny. (48; 37)
おかしくともなんともないものを見てハイエナのように笑った。
- 5) He slept like a rock. (65; 50)
岩（石）みたにに眠っていた。
- 6) ...they started giggling like morons. (91; 71)
薄鈍みたいにくすくす笑いだした。
- 7) I know Jane like a book – (99; 76)
ぼくはジェーンのことならなにもかも知ってるんだ。
- 8) [Horwitz] ...drove off like a bat out of hell. (109; 82)
タクシーの運転手は猛スピードで立ち去った。
- 9) The audience applauded like mad,... (177; 137)
観客はむちゃくちゃに拍手喝采をして...
- 10) I've lived in New York all my life, and I know Central Park like the back of my hand,... (200; 154)
ぼくは生まれてこのかたずっとニューヨークに住んでいるので、セントラル・パークのことは手に取るように知っているんだ。
- 11) He (=Mr. Antolini) smoked like a fiend. (242; 186)
先生はニコチン中毒みたいにタバコを吸うんだ。
- 12) It (=our front door) creaks like a bastard. (229; 177)
入り口のドアが馬鹿みたいに軌むんだ。

コメント。

引用 1) の 'like a madman' 方はずいぶん古くからあるもので、*OED* は十六世紀の例を挙げている。

1533 Ld. Berners *Huon* xxiii, 68 He wyll come after vs lyke a madd man.

気違いのようにわれわれの後を追いかけてくるだろう。

したがってこれはアメリカ語の俗語とはいえない。もともと'madman'は上の例のように二語であったものが、いつの間にか一語になり、いわば成句となったのだ。ホールデンは作中で八回も使用し、しかも下記の例のように人間ではなく物を主語にしているものも数例ある。そしてそれは擬人化といった修辞法とは無縁で、'like hell'と意味はまったく変わらない。

There were about three inches of snow on the ground, and it was still coming down like a madman,... (177; 137)

地面には三インチばかりも雪が積もり、まだどんどん降りしきっていた。

引用 2) の 'hate ... like poison' もアメリカ語ではない。OEDS は十六世紀以来の例をいくつも挙げている。

1530 J. Palgrave... He gyueth me fayre wordes and yet he hateth me lyke poyson.

彼は私に対して巧言を弄しはするものの、蛇蝎のごとく嫌っている。

引用 3) の 'land... like a panther' はごく自然な直喩である。ホールデンは豹のごとき勇猛さとは縁がなく、結局はルームメートのストラドレーターにかなうはずもなく散々な目に遭う。しかし女友だちのジェーン・ギャラハーに対する一種の騎士道精神に生きたいというパセッティックな気持ちがよく表されていて面白い。

引用 4) の 'laugh like a hyena' については、OED に引用されている次のような『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の一節が参考になる。

1881 *Encycl. Brit.* XII. 421/1 The Striped Hyena..Its unearthly howling..when the animal is excited, changes into what has been compared to demoniac laughter, and hence the name of 'laughing hyena'....

シマハイエナ.... 興奮すると、この世のものとは思えないその遠吠えは悪魔的笑いに譬えられてきたものへと変わり、そこから「笑うハイエナ」の呼称が生まれた....

普通 'laughing hyena'を辞書で引くと'spotted hyena'のことと記されており、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の記述と食い違いが、目下のところそれはたいしたことではない。重要なことは、'laugh like a hyena'という直喩がそういうハイエナの特徴から生まれたということだ。ホールデンは二度ほどこれを用いているが、すでに一九三〇年代にはアメリカ北東部で'yelled like a laughing hyena'という形で一般によく使われるようになっていたと報告されている。¹²ただ'laugh like a hyena'というそのものずばりの直喩が小説作品に現れたことがあるのかどうかは、分からない。

引用 5) の'sleep like a rock'。「ぐっすり眠る」は、'sleep like a top' (独楽こまのように眠る)、'sleep like a log' (丸太のように眠る)、'sleep like the dead' (死人のように眠る) といった比喩が有名で、すぐにステイーヴンソンの『宝島』の'and then slept like a log up hill and down dale'¹³ (丸太のように眠りながら丘を上り、谷を下り) やヘミングウェイの『日はまた昇る』(1926) の"Did you have a good night, Jake?".... "I slept like a log"¹⁴などを思い出すが、'sleep like a rock'はどのくらい一般的なのか、私にはよく分からない。大変味わいのある直喩であるが、ホールデン独自のものであるかどうか。なお「岩」といえば、『ハッ・フィン』には次のような一文が見られる。

I poked along well onto an hour, everything still as rocks and sound asleep.
(VIII, 66)

ぼくはたっぷり一時間近くもほっつき歩いた。なにもかも岩みたいにじっと動きもしないで、ぐっすりと眠りこけていた。

引用 6) の'giggle like a moron'. 'moron'はどういうわけか、ホールデンが愛用する単語である。ミトフォード・M・マシュウズ(Mitford M. Mathews)の『アメリカ語辞典』(A Dict. of Americanisms, 1951) の'moron'

を引くと、この語が一九一〇年の四月にアメリカで誕生したことが判明する。

1910 Henry H. Gaddard lett. 29 April in *Jrnl. Psycho-Asthenics* Sept.- Dec. 65 The other [suggestion] is to call them [feeble-minded children] by the Greek word 'moron.'

もう一つの提案は、そうした知能の低い子どもたちをギリシャ語の 'moron' で呼ぶことである。

'like a moron' は辞書的成句として定着しているわけではない。したがってこれは 'like a madman' や 'like a bastard' のように 'like hell' で置き換えることのできないもの、つまり「強意的直喩」ではなく、「記述的直喩」であるとしたほうがよさそうである。むろんこの辺は少々微妙なところで、ホールデンらしい「強意的直喩」として片付けてもいっこうに差し支えないのだけれども、しかし彼はジェーン・ギャラハーとデートしたストラドレーターを「薄汚い低能のとんま野郎」(a dirty stupid sonuvabitch of a moron, 58; 44) と精一杯の侮辱的表現で呼び、これにはさすがのストラドレーターも我慢しきれず、彼を痛い目に遭わせ、さらに彼自身が自分のことをも 'moron' と呼ぶ (I told him I was a real moron, 17; 12)、といったことなどを考え合わせると、この直喩はかなりの精彩を帯びてくる。したがって彼が第二十章で「しかししまいにはそこを出て、バカみたいによろめきながら洗面所に入って....」(Finally, though, I came out and went in the the men's room, staggering around like a moron, 197; 151) と語るとき、紛れもなく自己嫌悪感に満ちた「記述的直喩」となる。

引用 7) の 'know ...by a book'. *OEDS* はこれの意味について 'to know very well, understand perfectly' と説明し、次のような用例を引いている。アメリカ語の成句ではない。

1839 'H.. Franko' *Adventures of H. Franco* I, xi. 73 'Know him like a book,' replied Mr. Lummucks.

引用 8) の 'like a bat out of hell'. 『ライ麦畑でつかまえて』の読者のある

者はこれを読んで、なんという鮮やかなイメージだろうと感心するに違いない。「地獄から飛び出すコウモリのように」とはじつに痛快ではないか。

しかしこれはホールデンの独創になるものではない。ごく普通に使われる成句だ。たとえば『研究社新大英和辞典』では「《口語》まっしぐらに、猛烈なスピードで」、『ランダムハウス英和大辞典』第二版では「《俗》猛スピードで、向こう見ずに」とあり、『リーダーズ英和辞典』では「《口》猛スピードで」などとある。さらに『ジーニアス英和辞典』は小型辞典ながら「《英俗》すばやく、脱兎のごとく」と、やや突っ込んだ説明と訳語を付してある。「突っ込んだ説明」というのは、わざわざ「英俗」としているからだ。

だがこれを<英俗>とする根拠ははたしてあるのだろうか。このことについて少しばかり検討してみよう。

まず最初に英米の辞書を参照してみることにする。するとどういふわけか、*DAS* ではこの成句が扱われていないことに気づく。この由緒あるアメリカ俗語辞典が'like a bat out of hell'をアメリカ生まれの成句とは見做していなかったことになる。一方、*DSUE* では、

'bat out of hell, go like a.' To go, esp. fly, extremely fast: Air Force coll. : from 1915 F. & Gibbons.

つまり第一次世界大戦中、空軍の兵士たちによく使われた口語的表現で、典拠はFarmer & Gibbons, *Soldier and Sailor Words and Phrases*, 1925ということになる。さらに同じ辞典の第二巻になると、

'bat out of hell, go like a. As a 'civilian coll., it is at least as early as 1908 (Leechman)

と記される。つまり民間人の口語的表現としては、早くも一九〇八年に使われていたということだ。典拠はDouglas Leechman, *nemorous communication, especially in 1959*¹⁵だという。

ただ*OEDS*や*HDAS*はこの説を信用していないらしく、いわば無視した格好になっている。まず*OEDS*から見ていこう。

Slang phr. (to go) *like a bat out of hell*, (to go) very quickly.

1921 J. Dos Passos *Three Soldiers* (1922) II, ii, 67 We went like a bat out of hell along a good state road. 1925 Frazer & Gibbons *Soldier & Sailor Words* 19 *To go like a bat out of hell*, to go at extreme high speed (Air Force).

これを見ると、*OEDS*は一九〇八年説や一九一五年説を採用していないかのごとくである。それでは*HDAS*ではどうなっているだろうか。

like a bat out of hell at tremendous speed.

1909 *DN* III 399 [Ark.]: *Like a bat out of hell*, adv. phr. Very quickly. 1912 *DN* III 577: When I saw him he was going like a bat through hell. 1918 in Mills *War Letters* 353: He turned tail and and headed for Germany like a bat out of hell. (彼はくるりと向きを変えるや、地獄から飛び出すコウモリよろしく猛烈な勢いでドイツへと向かった)

*DN*とは*Dialect Notes*、つまりアメリカ方言研究誌のことである。そしてこの記載から分かることは、'like a bat out hell'はアメリカの方言的言い回しに起源をもつということだ。ここで私の勝手な推測が始まるのだが、それは、第一次世界大戦でヨーロッパに出征した田舎育ちのアメリカ青年たちがこの方言的成句を軍隊仲間の間に広めたのではないかということである。

OEDS に記載されているドス・パソスの『三人の兵士』からの引用は引用符が取り払われているため、それが物語りの地の文であるかのような印象を読者に与える。しかし実際はある特定の登場人物の台詞なのである。この作品には 'like a bat out of hell' が延べ四回出てくるが、それらはすべて Dan Cohen というアメリカ人兵士の言葉である。舞台は第一次世界大戦中のフランスのとある町のカフェ。そこで酒を飲んでいるアメリカ人兵士たちの間にこの Dan が飛びこんできて、野戦救護隊員としての冒険談を自慢げに語るときの言葉であった。

"..., Bill Rees an' me'ld stop off every now and then to have a little drink an' say 'Bonjour' to the girls an' talk to the people, an' then we'd go like a bat out

of hell to catch up." (76)

「... ビル・リースとおれはしょっちゅう飲み屋に立ち寄っては一杯やり、女給たちにくボンジュール>と言いながらお客たちと雑談をし、それからみんなに追いつくためにさっと引き揚げるなんてなことをやってたってわけさ」

"Well," he went on, "we went like a bat like out of hell along a good state road, and it was all fine until one of the captains thought we ought to have a race." (77)

「それでな」と彼は言葉をつづけた。「おれたちは立派な国道を猛スピードで飛ばしたんだが、大尉の一人が自動車競争をやらなきゃ、なんて思いつくまではなにもかも順調だったんだ」

"..., an' so we put all the gas in my car an' the four of us climbed on that goddam chasis an' we went off like a bat out of hell!" (77)

「... そこでおれたちはおれの車にガソリンをたっぷり入れ、四人が車台にのぼるやいなや、さっと飛び出したんだ」

"He (=that frog) shot the juice into her an' went off like a bat out of hell an' there was a hell of a lot of traffic on the road because there was some damn-fool attack or other goin' on." (78)

「そのフランス人野郎が車にガソリンをつめこみ、地獄を飛び出すコウモリよろしく突っ走ったんだが、どっかでいまいましい攻撃かなんかがあったもんで道路がやけに込んでいやがった」

というわけで、'like a bat out of hell'はもともとアメリカの方言に起源をもつ成句であったものが、第一次世界大戦とともにひろく一般に使用されるようになり、それが第二次世界大戦後のホールデン少年の語法にまでまぎれこんできたというわれわれの仮説が正しいとすれば、『ジーニアス英和辞典』の<英俗>という説明は訂正されねばならないことになる。

引用 9) の'like mad'。これはごく普通に使われる強意的直喩だ。ホール

デンは二回ほど使っている。*DAS* は 'like mad=like crazy' として、まるでアメリカの俗語であるかのように扱っているが、本来はアメリカ語ではない。古くからイギリスで使用されてきたもので、したがって *HDAS* には記載されていない。ただし 'like crazy' はアメリカ生まれで、*HDAS* は一九二四年からの用例を挙げている。

1924 Marks *Plastic* 228: She has been... tearing around like crazy.

彼女はまるで気違いのように暴れまわっていた。

'like mad' について *OED* は十七世紀半ばから十九世紀末にいたるまでのものをいくつも挙げ、その中にはフィールディングやリチャードソンからの引用も含まれている。

1653 H. More For she was then seen..in her fetters, running about like mad.

それといたしますのも、あの女は足枷をはめられたまま、狂ったように走り回っている姿が見られたからです。

ここでアメリカ小説に見られる用例として、またしてもドス・パソスの『三人の兵士』から引いておくと、

The thought set his heart like mad. (199)

それを思うと、心臓が激しく打ち始めた。

引用10) の 'know like the back of my hand'。これは引用7) の 'know like a book' と同じ意味であるが、初出は、*OEDS* で見る限りでは二十世紀半ば近くということです。いぶんと遅い。もちろんアメリカ英語ではない。

1944 'M. Inns' I know that book like the back of my hand.

その本のことなら自分の手の甲のように詳しく知っている。

引用11) の 'smoke like a fiend'。これは同じホールデンの "I went right on smoking like a madman." (55; 42) の 'like a madman' とほとんど同義である。ただ 'like a fiend' そのものは成句になっているわけではないので、文字通り

「ニコチン中毒のように」という意味の「記述的直喩」と見做したほうがよいかもしれない。'fiend'も'moron'と同様、ホールデンの愛用語の一つで、彼は'a Canasta fiend' (61; 47)、'a fresh-air fiend' (64; 49)、'a dope fiend' (64; 49)などと言うから、'like a fiend'もホールデンらしい直喩である。なおこのような意味で使われる'fiend'はアメリカ生まれのもので、一八八〇年代に発生した。ドライサーの『シスター・キャリー』(1900)に次のような用例が出てくる。

Like the morphine fiend, he was becoming addicted to his ease.¹⁶

まるでモルヒネ中毒患者のように、安逸を貪るようになりつつあった。

引用12) の'like a bastard'。これは生粋のアメリカ生まれの俗語的成句である。HDAS はこれを'as [or like] a bastard (used as a strong comparative)'として記載している。OEDS にはこれについての独立した項目はない。なお 'as a bastard' については別の機会に改めて考察するとして、'like a bastard,'の初出例は次のごとくである。(HDAS)

1938 Adamic *My America* 54: He is a writer and...he writes like a bastard, no kiddin'.

あいつは作家だ... ががむしゃらに書きやがるんだ。本当だとも。

比較的新しい強意的直喩である。ホールデンはこの俗語成句が大変好きで延べ七回も使用している。これは'like a madman'の八回に迫る勢いだといったらよいだろう。そしてこの七回のうち二回についてHDAS が引用しているのだから、サリンジャーにとっては名誉なことだといわねばならない。

1941-51 *Salinger Catcher in Rye* 102: My voice was shaking like a bastard.
Ibid. 212: It began to rain like a bastard.

なお安藤貞雄氏はこの' like a bastard' についてこう述べている。

... *like a bastard* は、その原義にもかかわらず、人主語以外の主語に

も共起することができる。しかし、厳密に言えば、たとえば、[It creaks like a bastard.]は「ひどくギーギーきしみやがる」というような、多少とも、主語を擬人化する気持ちを感じられる、そういうニュアンスを、*like hell*は持っていない。¹⁷

しかしこの指摘はいささか穿ちすぎのきらいがありはしなしか。たとえば『ライ麦畑でつかまえて』の第十一章には雨に関して'*like a bastard*'と'*like hell*'の双方が同じパラグラフに出てくるが、この二つの成句にニュアンスの相違があるとは思えない。

It was a Saturday and it was raining like a bastard out,....(101; 78)

ある土曜日のことだったが、外では雨がさかんに降っていた...

It was raining like hell and we were out on her porch,...(102; 76)

雨は土砂降り、ぼくらはジェーンの家ポーチに出ていた.....。

このことは'*as a bastard*'にも言えることで、次の天候について語る例(HDASから借用)に関して擬人化云々を言いだすことは不自然であろう。

1932 Hecht & Fowler *Great Magoo* 97: Hot as a bastard, ain't it?

やけに暑いですね。

なお「土砂降り」のことを英語で'*rain like fury*'とも言い、*OED*には次のような引用がなされ、またマーク・トウェインの『ハック・フィン』にも登場する。

1840 Longf. In *Life* (1891) I. 359 The last eighteen miles it rained like fury.

最後の十八マイルは篠つく雨でした。

Directly it begun to rain, and it rained like all fury, too,.... (*Huck Finn*, IX, 75)

すぐに雨になった。おまけに土砂降りだった。

このように『ハック・フィン』の直喩的表現は正統的なものであって、

すでに述べておいたように、この作品には'like hell'は一度も登場しない。現代アメリカ小説における口語的・俗語的・方言的表現、つまりは vernacular 的表現に道を拓いた十九世紀小説としてフォークナーやヘミングウェイによって最高の賛辞を与えられ、また『ライ麦畑』の生みの親ともいべき榮譽を担う『ハック・フィン』ではあるが、十九世紀と二十世紀のアメリカ小説のあいだには少なくともこれだけの言語的懸隔があるのだ。

以上『ライ麦畑』に見られる、'like'を用いた直喩的表現のあれこれについてコメントを加えてきたが、まだ少々問題は残っている。

動詞の直後にくる同じ'like hell'でありながら、『ライ麦畑でつかまえて』には一度も登場しない使い方がある。それは *HDAS* が 'Specif., in phr. Look [or feel] dreadful' と定義づけている成句で、*OEDS* では扱われていないものだ。したがってこれもアメリカ的俗語であるということが出来る。そしてこれはヘミングウェイがとくに書簡の中で愛用した言い回しであるが、たとえば次のような例が『日はまた昇る』に見られる。

"How do you feel?"

"I feel like hell" (223)

「気分はどうかね？」

「だめだね」

じつはこの引用のすぐ前で以下のような会話が行われていて、この場合の'like hell'は、われわれが先に問題にしてきたような、単に先行する動詞の意味を強める働きをしているのではなく、それこそ「地獄のような気持ち」という実質的な意味を担っている。

"What's the matter? Feel low?"

"Low as hell."

"Have another absinthe. Here, waiter! Another absinthe for this señor."

"I feel like hell," I said. (222)

「どうしました？ 気分が悪いのか？」

「悪いどころじゃないんだ」

「アブサンをもう一杯飲んでみたら。おい、給仕！このお方にアブサンをもう一杯」
「まるでだめだね」とぼくは言った。

ここに見られる'low as hell'は、同時にホールデン好みのものでもあるわけだが、彼にはこの種の'feel like hell'という言い方は見られない。彼はこうした場合'fell lousy (as hell)'と言う。

しかしホールデンは'feel like hell'と言わない代わりに、別の面白い、そしてアメリカ固有の俗語を使用している。もっとも一度だけではあるが。

I certainly began to feel like a prize horse's ass, though, sitting there all by myself. (112 ; 86)

しかしぼくがそんなところに一人ぼっちで坐っていると、ほんとうに惨めでやりきれない気分になってきた。

名訳の誉れが高い野崎孝氏の訳文では、「しかし僕は、次第にいらいらして落ちつかなくなった」云々となっているが、少しばかりニュアンスが違うようだ。まずこの引用に見られる'a horse's ass'（馬のお尻）とは、*HDAS*によれば、'a stupid or contemptible person, usu. a man. — usu. considered vulgar'という意味である。これはアメリカで南北戦争時代から使われ始めたらしく、同辞典は初出の例を次のように引用している。

a 1865 in J. I. Robertson *Blue & Gray* 128: [He is a] horse's ass.

あいつはダメ男だ。

また'a prize horse'とは優勝馬のことで、したがって最高の気分という意味にもなりそうだが、さにあらず。'prize'という形容詞は'a horse's ass'の意味をいっそう強めるためのもので、たとえば同じ*HDAS*の次の用例における'pompous'と等価の表現だ。

1934 in J. O'Hara *Sel. Letters* 90: I met her father-in-law, a pompous horse's ass.

私は彼女の義父という人に会いましたが、まったくダメな男でした。

というわけで、'feel like hell'に代わる'feel like a prize horse's ass'は少しばかりホールデン独特の直喩的表現の一つであるといえよう。HDASが『ライ麦畑でつかまえて』のこの表現を採用してくれなかったのは、大変残念なことだと私は思う。

最後にホールデンにおける、'like'を伴う直喩的表現の最高傑作を例示して本稿を締め括ることにする。それは、彼がワシントン州のシアトルからはるばるやって来たという三人の女性のうちの一人、マーティ (Marty) というブスとダンスをしたときの感想を表したものである。動きもままならぬ巨大なく自由の女神を相手にしたダンスとは絶妙な比喩ではないか。

Old Marty was like dragging the Statue of Liberty around the floor. (99; 74)

マーティと踊るのは、まるでく自由の女神を抱いてフロアのあちこちを引きずり回しているようなものだった。

注

- 1 *The American Language*, 314.
- 2 F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (N. Y: Charles Scribner's Sons, 1925.), 146.
- 3 William Faulkner, *Soldiers' Pay* (1926; Signet, 1951), 8.
- 4 John Dos Passos, *Three Soldiers* (1921; Boston: Houghton Mifflin Co., 1949), 362. 以下この版のページを本文中に記す。
- 5 *American Speech*, VI, 6 (August 1931), 433.
- 6 *Ibid.*
- 7 安藤貞雄『英語語法研究』, 144.
- 8 William H. Gass, *The Tunnel* (New York: Alfred A. Knopf, 1955), 136.
- 9 Elaine Steinbeck and Robert Wallsten (eds), *Steinbeck: A Life in Letters* (1975; Penguin Books, 1976), 569.
- 10 Stephen Crane, *The Red Badge of Courage* (1895; A Norton Critical Edition, 1962), 46.
- 11 "Hapworth 16, 1924" in *New Yorker* (June 19, 1965), 32.
- 12 *American Speech*, IV, 6 (August 1928), 472.
- 13 R. L. Stevenson, *Treasure Island* (ed. Sanki Ichikawa [1883; Tokyo: Kenkyusha, 1935], 50.
- 14 Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (1926; Charles Scribner's Sons, 1954), 100. 以下この版のページを本文中に記す。

- 15 同じく *DSUE* では、
 like bats out of (1) Hell or (2) a cave. M great haste, or with alacrity, esp of
 departure: (1) mainly English; (2) mainly Canadian. (Leechman.) Since middle 1930's.と
 いう項目の説明もあるが、これについては今の私にコメントをつける準備がない。
- 16 Theodore Dreiser, *Sister Carrie* (1900; New York: Rinehart, 1960), 329.
- 17 『英語語法研究』, 145.